



がっこう 学校だより

がっこう
2月号



**Challenge
Dream
Interaction**

れいわ ねん がつ か
令和2年1月31日
よこはま しりつがみい いだしょうがっこう
横浜市立上飯田小学校

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/kamiida/>

えいが け み 映画「蹴る」を見て

こうちよう よこやまよしあき
校長 横山 美明

1月25日に瀬谷公会堂で「蹴る」という映画を見てきました。この映画は、電動車椅子サッカーのドキュメンタリー映画で、主人公は「Yokohama Crackers」に所属する永岡真理さんという方です。永岡さんは、本校の金田主幹教諭が「Yokohama Crackers」の総監督を務めているチームの所属ということもあり、昨年12月にも人権教育の一環として来校し、高学年の子ども達に競技用電動椅子や電動車椅子サッカーのデモンストレーションを見せてくださいました。私自身も実際にプレーを見るのは初めてでしたが、子ども達と同様「すごい！カッコいい！」と感じました。そういった経緯があり、「蹴る」という映画が公開されるとお知らせをいただいた時には、是非とも見てみたいという気持ちになりました。この映画とその後に行われた永岡選手と中村監督の対談から、自分が今まで知らなかったことや気付かなかったことなど、たくさんのお話を教わり考えさせられました。

まず感じたのは、映画に出てくる選手は、障害の程度に関わらず、トップアスリートとして輝いていて、その陰には弛まぬ努力と強い精神力、またそれに伴う悩みもあるということでした。障害者スポーツと呼ばれているものも一般のスポーツと全く変わらないのだと改めて実感しました。

次に感じたのは、障害者スポーツに潜む矛盾でした。それは、映画のワンシーンと中村監督の言葉からでした。映画の中である選手が「これでは障害者スポーツじゃなく、モータースポーツじゃないか。」という言葉をつぶやきます。これは、海外の競技用電動車椅子は性能が向上し、乗り手がその加速や回転に耐えられなくなってしまってきているということです。障害者のために生まれたスポーツであるにもかかわらず、マシンの技術のみが進歩して、肝心の乗り手の体に負荷がかかりすぎ、頑丈な人しか乗ることができないということです。これは、障害者のスポーツでありながらも競技スポーツであるということの宿命なのかもしれませんが、とても考えさせられました。また、選手としての技術やセンスがトップクラスでも、飛行機での移動ができないという理由で代表になれないという難しさも描かれていました。電動車椅子サッカーは、まだパラリンピックの種目には含まれていません。パラリンピックとはいえ、その正式種目として認められているのはほんの一部だそうです。

今年にはオリンピック・パラリンピックが開かれます。これを機に、私自身もいろいろな角度からパラリンピック競技を見て、しっかりと考えてみたいと思います。